

一 次のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) ヤオモテに立つ (2) フクシヨウの景品 (3) お金をタイシヤクする (4) シュウトク物置き場 (5) 結婚式のヨキヨウ

二 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

身体は「体」と「身」に分けて考えることができる。体は最近の医学において示されているように、ますます物質化、物体化が進んでいる。

体を物体・物質と見る見方の歴史は長い。二〇世紀以降、幾分あいまいなところがあった生命に関しても遺伝子のメカニズムが解明されたことにより、あつという間に生命もかなりの程度までコントロールできるようになってしまった。遺伝子工学によって、生命（生物）の合成がなされようとしている。あるいは臓器移植は明らかに臓器の部品化である。あたかも車の部品を交換するように、人から人へと移し代えることができるようになった。

このような医学の現状を歩進歩と見るか、破壊と見るかは個人の価値観によるが、確かなことは体は物体であるという物質観・物体観をますます深めることになっていくということである。

これに対して、身はどうであろうか。現代の医学では身体の中の体だけを扱っていて、身は放棄されてしまっている。現代人も身に関しての関心は薄れているのが現状のように見える。

しかし身という言葉は、日常かなり使われているのである。たとえば魚の切り身という場合、身は肉を表すような意味に使われる。これは体と同じといえる。

しかし③身は体以上の意味内容をも含んでいる。「身構える」というと体ではあるが、単なる体ではなく、体のありようを示しているといえる。あえていえば、「心構え」に通ずるものである。

さらに体の意味を離れて、「わが身」や「御身」というときには、体ではなく④「身」を表す意味になっている。また「身内」というときには、仲間を表す。「身分」となると明らかに人間の社会的な意味を表している。

さらに心の意味すら持つことがある。たとえば「身を焦がす」とは明らかに心の状態を表している。「身に沁みてわかる」とは理解の仕方が深いことを意味しているといえる。

このように、身は身体的な意味を含みつつ明らかに体とは異なる概念として、

日常使われている。身は物質や物体とは異なっている。体が物体化・物質化すればするほど、身は体とは異なる身体の中の別の意味を強調する意義を持っている。すなわち身は物質的な存在としての⑤「身」とは異なり、それ自体で⑥「心」をも含む概念なのである。東洋では精神と身体を分けられないという心身一元論が謳われているが、実は身のみで心身一元論なのである。

身・体の次元に対して、精神（心・霊）の次元はどのように考えられるであろうか。まず「心」である。心という精神のことであると思うのが一般的であろう。これは間違いないが、一歩深めて考え直す必要がある。心という字を辞典で引いてみると、まず第一の意味として、心臓のことと書いてある。⑦この意味は現代人にとってはほとんど死語になっている。しかし語源的にいうと、心という字は心臓の象形文字であるといわれている。ちなみに中医学（東洋医学のこと）における経絡図で、心経という心臓系を意味する。このように心の元来の意味は心臓である。

しかし、現在では心は精神の意味にもなっている。つまり心は身と同じように、その言葉自体で身体と精神の意味を含んでいる概念であるといえる。このことは注目すべきことであろう。心身一元論であるという以前に、心は身と同じように心の一字で心身一元論なのである。

次に「霊」の概念について少し考えてみたい。まず心との区別を考えておきたい。現代では体は精神とは関係なく、ますます物質化してきているが、体の唯物質化が進むほど人間の精神面が希薄になる傾向がある。果たしてそれでよいのであろうか。この危惧を解決するためには、物質を排除した純粹な精神の存在を考える必要がある。そう考えると、心は体と関係があるので、心とは異なる概念を持ち出さねばならない。それを「霊」と考えたい。聖霊とか靈魂とも表現される。心は体とは切り離せないものであるために、体が死んでしまうと一緒に喪失してしまう。このことは自明のこととして、現代では理解されている。しかし一昔

前までは、靈魂は肉体が滅ぶと体から出てゆくものと考えられていた。つまり⑧「心」なのである。

遺伝子工学の進歩によって、クローン人間の出現が取り沙汰される現状において、⑨物質のみではない人間のあり方を回復するためには、心の他に霊といった

概念を必要とするように思われる。霊の実体は何かといったことは、ここでは論ずることをひかえよう。これは心理学ではなく、宗教が考えるテーマであろう。

（春木豊『動きが心をつくる』講談社現代新書）

- (1) ①「身は体以上の意味内容をも含んでいる」とはどういうことですか。このことを言い換えたものを本文中から三十五字以上四十字以内で探し、はじめの五字を答えなさい。

- (2) ②に入る語を答えなさい。
ア 身分や社会 イ 孤独と集団 ウ 自己や他者 エ 本音と建前

- (3) ③・④に入る語を、本文中からそれぞれ漢字一字ずつで書きぬきなさい。

- (4) ⑤「この意味は現代人にとってはほとんど死語になっている」とはどういうことですか。
ア 心と精神の概念は区別しにくい
イ 心と身体は密接であり、身体の一部である心臓はすでに解明し終えた古い概念であるということ。
ウ 心の中には精神の他に「霊」の意味を含んでいるため、心の字から死を連想することが多いということ。
エ 心という字から心臓という意味を連想する人は少なく、それ自体で精神と身体の意味を含むということ。

- (5) ⑥に入る語を答えなさい。
ア 霊は体から生じるという概念
イ 霊は身の対極にあるという概念
ウ 霊は体以上の意味を含んだ概念
エ 霊は体とは切り離された概念

- (6) ⑦「物質のみではない人間のあり方を回復するためには、心の他に霊といった概念を必要とするように思われる」とはどういうことですか。
ア 体の唯物質を防ぐために、体の概念を含まないものを想定することで希薄化した精神に焦点を当てる必要があるということ。
イ 現代において物質としての体の実体は解明されているため、心と深いつながりのある霊の概念の解明が急がれるということ。
ウ 科学では心を解明することは不可能であるため、霊の概念を解明することの方が人間らしさの回復の近道であるということ。
エ 物質としての体は制御可能とする医学に抵抗するためには、以前は信じられていた霊の概念を復活させるべきだということ。

三 次の詩を読み、下の問いに答えなさい。

座敷童子

小沢千恵

源じいの家は
商店町の高いビルのまん中で
たった一軒
重石みたいな 黒いかわら屋根が
地面に張りついて
建っていた

古い木戸をあけると
もう何年も 何百年も前の
冷えきった空気と
古ぼけた天井や壁には
ご先祖さまのため息と
汗の結晶がほこりとなって

①

そして ぼくが
吹き抜けのうす暗い台所の
タナの上を見上げると
あいつは いつも
待ちくたびれたような顔をして
じーっと
ぼくを 見おろしている

「やあー 元気だったかい？」
(ああ……)

あいつは
いつ見ても

さんばら髪^{がな}の頭に
つつ袖姿^{そでぎ}の着物で
高いタナの上に腰^{こし}かけて
足をバラン バランと動かして
ケタケタと笑う
そして

(天明の大火を知ってるか
三条河原の釜ゆで^{かまゆで}刑^{けい}も
金閣寺の天をこがす炎^{ほのお}も
おいらは 知っているんだぜ)

② あいつは生意氣^{しんぎ}に
ぼくの知らない長い歴史のことを
しゃべりまくる その度に
あいつのまわりに
風が巻き上がる

ぼくは その流れる風の中で
たしかに聞いたんだ
流れていこうとする風と
流れに逆らおうとする風の中の
③ さげび声を

源じいの古い家は
もうすぐこわされて
そこにビルが建つという

あいつは
これから どこへ行くのだろう

(小沢千恵『つるばら』らくだ出版)

(1) この詩は、多くの表現技法を用いながら効果的に展開されています。使われているものをすべて選びなさい。

ア 擬人法
イ 見立て
ウ 呼びかけ
エ 倒置法
オ 比喩
カ 対句
キ 擬態語

(2) ①に入る語を答えなさい。

ア ちらばっていた
イ かくれていた
ウ よどんでいた
エ まいあがつていた

(3) ②「あいつは生意氣」とありますが、(ぼく)はなぜこのように感じたのですか。

ア 座敷童子のほうが(ぼく)の知らないことをたくさん知っていたから。
イ 座敷童子があたかも源じいの家の主であるかのようにふるまっていたから。
ウ 座敷童子はいつも(ぼく)に向かって軽薄^{けいはく}そうな甲高い声^{かんたかいこゑ}で笑うから。
エ 座敷童子が誰も聞いていないのに、出すぎたおしゃべりを続けたから。

(4) ③に入る語を答えなさい。

ア 悔しい
イ 悲しい
ウ 恋しい
エ 激しい

(5) この詩を説明した次の文章について、以下の問いに答えなさい。

「座敷童子」とは、もともと東北地方(特に岩手を中心)に伝えられる家の守り神で、童児の姿で子どもには見えても大人には見えない、あるいは、それがいる家には幸いもたらされ、いなくなると落ちぶれる、などという伝承がある。

京都にある(源じい)の家は、周囲で都市開発が進み、とうとう最後の砦^{とりで}となった。

この詩は、その家に(ぼく)が足を踏み入れるところから始まる。

④ ずいぶん久しぶりに訪れた(源じい)の家は、昔ながらの木造家屋。昔の人の人知れない苦労や努力^{くろうとにっくり}がたくさん詰まった家。今は誰も住んでいないが、この家はご先祖さまが「生きた証^{あかし}」であり、家族の⑤がそこに刻み込まれ、人の⑥を感じさせる場所でもある。そして、ここへ来ると必ず迎えてくれる(あいつ)は、ご先祖さまと(ぼく)をつなげる役目をしていた。

ところが、(あいつ)とも今日が最後。冷たく無機質なビルになってしまえば、もうここに来て同じような⑦を感じられなくなるだろう。

(あいつ)のまわりに巻き上がった「流れていこうとする風」が【町全体が開発によって新しく生まれ変わろうとしていること】であるならば、「流れに逆らおうとする風」は、【町全体が⑧】ということと言い換えることもできる。

「変わるもの」と「変わらないもの」——古い歴史をもつ京都の町並みの秘めた物語は、同時に作者のたどってきた幼少期の残像風景でもあるかもしれない。

① (ぼく)が——①「ずいぶん久しぶりに訪れた」のは詩中のどのような表現から分かりますか。詩中の言葉を用いて「くから」に続くように、その理由を十五字以上二十字以内で答えなさい。

② 「人知れない苦労や努力」は、詩中のどのような表現から分かりますか。五字以上十字以内で答えなさい。

③ ①に入る語を詩中から一語で書きぬきなさい。

④ ②(二カ所)に入る語を自分の言葉でひらがな四字で答えなさい。

⑤ ③にはどのような表現が適切ですか。詩全体の内容をふまえて、「く」ということと」に続くように、十五字以上二十字以内で説明しなさい。

四 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

人間の道徳観や倫理観のベースとなっているものは、多くの欧米人にとってはキリスト教の教えであり、韓国や中国を含む東アジアでは儒教の教えである。

日本もかつては儒教思想が幅を利かせていたが、明治維新、そして戦後の西洋文化流入の中で急速にその影響力を失っていった。「義理」「人情」「孝行」「忠誠心」といった概念はもともと儒教のものであったが、今日の日本では、特に儒教との結びつきを意識せずに用いられることのほうが多いだろう。

キリスト教世界では「神」がきわめて大きな存在であり、人間の行動を見守り、それを厳しく律している。神への背信行為は「罪」となり、人間は相応の「罰」を受けることになる。

④ 日本人の多くは無宗教であり、正月には神社に初詣に出かけ、結婚式は教会で挙げ、死んだら寺にあるお墓に入ることにについて、あまり疑問に感じることではない。

欧米人と違って、神の存在によって自分の行動の善悪が判断されることはまずないが、だからといって日本人がハチャメチャな行動をするかというところでもない。世界的にも安全な国で調和の精神で暮らす礼儀正しい国民というイメージがある。

では、神を持たない日本人の行動を規制しているものはなにか。それは「世間の目」であり、みっともない行為をして世間から冷たい目で見られることが、とても恥ずかしいということになる。「面子」と「世間体」を失って「恥」をかくことが、日本人にとってはなにより怖いことなのである。

ここで世間とはどういう存在かを考えてみよう。

日本人のコミュニケーションを理解するとき、「ウチ（内）」と「ソト（外）」の二つの領域を考える必要がある。ウチは「身内」「ウチ（自分の会社）」の間、「内」⑤」という言葉に表されるような「自分が帰属する集団」を指し、ソトは自分にとっての部外者である「自分が帰属するもの以外の集団」などを指す。

日本人はこの二つの世界をハッキリと区別していて、態度や行動パターンに違いが見られるという。

世間は、この「ウチ」と「ソト」の二つの世界の中間に位置し、ある種のバッ

ファー・ゾーン（緩衝地帯）になっている。

世間には、自分とならんからの関わり合い（利害関係）を持つ、自分のことをある程度知る、その「存在」や「視線」を意識する不特定多数の人間が含まれる。たまたま同じ空間を一時的にでも共有する人たち（同じ電車に乗っている人、同じ通りを歩いている通行人、同じ店で買い物や食事をしているお客、ご近所さん。企業であれば、メディアや、消費者としての一般大衆が、すべて「世間」の中に含まれる。

ミスをしたり、不祥事を起こしたりすれば「世間に対して顔向けができない」「恥ずかしい」ということになる。要するに「世間の目」が、「恥」という不快な感情をベースにして日本人の行動をある意味で規制していると言える。外の世界は「ウチ」に対しての「ソト」であり、この二つは関連性があるが、よく考えると日本人には、「ソト」の世界の遥か向こうにさらに「ヨソ」の世界があることに気づく。

外国では、現地の人間は日本人にとってウチの人間でも、ソトの人間でもない。自分の周りにいるのはすべて自分とは無関係なよそ者である。外国の空港に降り立つやいなや、「世間」が一瞬のうちに消滅し、行動抑制のタガが外れてしまう。

パリやローマの高級店でブランド品を買いあさったり、高級レストランで食事の中に大勢で騒いだりして現地の人々が眉をひそめようがお構いなし。「旅の恥はかきすて」とばかり、傍若無人な振る舞いをする一部の日本人の行動は、まさにこれである。

同様に、日本の中でも最近の若者の一部では、この「世間」の存在が希薄になってきているという観察もできる。通勤電車の中で化粧をしたり、朝食代わりの菓子パンを頬張ったりする若者、ドアの横でいちやつく若いカップルなど、⑥周りの視線などまったく気にしていない様子である。

ゼミの学生に聞いてみたところ、彼らが気にするのは基本的にはウチの人間、特に「友達」の評価であって、「世間」という意識はあまりないという答えが即座に返ってきた。ある学生がこんなことを話してくれた。

「自分は『世間体』といったものはあまり気にしていない、もし大学を卒業して

きちんと就職もせずフリーターになったとしても、そんなライフスタイルに自分が納得でき、周囲の友達もそんな自分を受け入れてくれれば、別に恥ずかしいとは思わない。親はそんな自分を見てきつと『世間体が悪い』と思うかもしれないが……」と。

これを世代間のギャップと取るべきか、日本人の考え方の変化と取るべきか難しいところだ。

先に述べたように、特に若い世代で変化は見られるものの、多くの日本人の「顔」はソト、特に世間に向けられている。

内 ⑦で家族には威張っているが、家（これも「ウチ」の領域）から一歩出たとたんに腰が低くなる、いわゆる「外面がよい」というのも、いかに日本人が世間の評価や視線を気にしながら生活をしているかを物語るものだろう。

日本人の顔や面子は、それだけで独立して存在するものではない。自分の顔と相手の顔が相互に依存しているし、連動している。様々な状況で配慮しなければならぬ、あるいは守らなければならないのは、自分の顔や面子だけではない。

(1) ⑧に入る語を答えなさい。

ア 系統的に イ 全体的に ウ 常識的に エ 対照的に

(2) ⑨（二カ所）には共通の人物名が入ります。ひらがな四字で人物名を入れ、「内」⑩」という慣用句を完成させなさい。

(3) ⑪「世間の目」の「目」とはどのようなものですか。本文中から五字で書きぬきなさい。

(4) ⑫「周りの視線などまったく気にしていない」とはどういうことですか。

ア 欧米人は世間を気にしないので、日本人の行動は海外で受け入れられないということ。

イ 若い人たちはソトからどう見られているか、ということには気を配らないということ。

ウ 身近で親しい人たちには、どのように見られても誤解されない自信があるということ。

エ 欧米の個人主義が急速に伝わり、世間に対する意識は年々低くなっているということ。

基本的には、⑬相手の顔をつぶさずに、上手に自分の顔を立てるようにしないといけないし、場合によっては、自分の顔より相手の顔を立てないといけないケースもある。

特に自分よりも目上の人間に公衆の面前で恥をかかせたり、面目丸つぶれの状態に陥れたりするのは、絶対に避けなければならない。いかに不条理であっても「和」「調和」「協調性」といったことに価値をおき、集団の一員としての人間関係を重視する日本人にとって、これは絶対に守らなければならない基本的なルールである。

個人主義の欧米の社会では、自分の面子だけを心配していればよいが、日本人はそうはいかないのがつらいところだ。「私の顔」と「あなたの顔」の両方に配慮してコミュニケーションをしないと、いろいろ問題が起きてしまうだろう。

（中西雅之『なぜあの人とは話が通じないのか？』光文社）

*緩衝：二つのものの間にある対立などをやわらげること

(5) ———— ⑤「相手の顔をつぶさずに、上手に自分の顔を立てるようにしないといけない」と日本人が振る舞うのはなぜですか。「くから」に続くように、本文中から十八字で探し、はじめの五字を書きぬきなさい。

(6) 本文の内容と一致するものをすべて選いびなさい。

ア 日本人は協調性を大切に考えているので、多くの人の前で相手の面子をつぶさないように配慮している。
イ 神の存在の意識が低い日本人は行動を抑制することが難しく、世界的に評価が低くなってしまうている。
ウ 失敗をしたときに「恥はずかしい」と感じるのは、日本人が周りに向けて面目を気にしているからである。
エ 世間の目や関かわりの薄い人からどう見られているかを強く気にする最近の日本人は行動が萎縮いしく気味である。
オ 日本人の若者は欧米の影響を受けやすく、個人主義を見習おうとして周りの視線をあまり気にしていない。

好恵は平凡な女の子だった。愛嬌はあるが、大雑把でバランスの悪い顔立ち。中肉中背で勉強も運動も人並み。でも、サービスピ精神旺盛でリアクションの達人だったから、男子からは一番人気があった。私は、そんな好恵と今年も同じクラスになった。

「今度の日曜日、あたしのお誕生日会やるから、みんなで来てね」と、好恵からの誘いを受けたのは、まだ四年生も板についていない六月のことだった。

誕生会とは私たちのビッグイベントだ。グループの誰かが誕生日を迎えるたび、私たちはその誕生会に必ず出席し、自分のときにもグループ全員を招待する。それが仲間内の不^①となっていたから、好恵が誕生会を開くのもごく当然のことだった。

にもかかわらず、好恵からの招待を受けた私たち五人は、そろって「あれ」というふうになんてこねてしまった。今年も好恵の誕生会はないのではないかと、思っていたからだ。

一年前の六月十日、真つ先に九歳を迎えた春子に次いで、当然、開かれるものと思っていた好恵の誕生会は、「お母さんが病気になるから」の一言でお流れとなった。私たちはしかたなしにプレゼントだけを渡して^②を濁したけれど、ケーキもごちそうもプレゼントのお返しもない誕生日はひどく味気なかった。

好恵のお誕生会の当日、私たちはみな色とりどりのリボンで包んだプレゼントを手に、胸をときめかせて初めて彼女の家を訪れた。

色鮮やかな飾りの施されたリビングを期待していた私たちが通されたのは、

「うちはね、誕生会はやらないことになってるの。お姉ちゃんも、弟も。だから、好恵が何言ったか知らないけど、今日は帰ってね」

帰ってね。

私たちの一人一人を見回しながら、確かにおばさんはそう言った。

窓からの明々とした陽を浴びていた。みんなの顔が、瞬時に一層、赤く染まった。誕生会では歓迎されるのが当然の権利と考えていた私たちは、この唐突な拒絶の受けとめかたがわからずに静まり返った。くう、と誰かのお腹が鳴っても、いつものような忍び笑いはきこえず、その音はただ虚しく宙に浮いたきりだった。

やがておばさんが低いため息とともに階下へ消えると、好恵は泣き顔を隠すように襖をへだてたとのりの部屋へ閉じこもり、残された私たちも床に散ったリボンを踏みながらその部屋を出て、さっさと家に帰った。

私たち五人は「冗談じゃない！」と好恵の悪口を言いふらした。結果、翌日にはクラス全員に知れ渡ったが、周囲はむしろ好恵に同情的で、「意地悪なお母さん」「鬼母」と伝説を残して忘れ去られようとしていた。

私たちは好恵を許さなかった。そこで、ひそやかな復讐を企てた。

「好恵とは一応、仲良くする。でも、もう私たちのお誕生会には呼ばない。お誕生会の恨みはお誕生会で返すべきだし、それに、休日のパーティーまではクラスメイトの目も届かないでしょ」

最初、春子がこの復讐案を口にしたとき、私はなんとという妙案だろうとすっかり^③。誕生会の恨みを誕生会で返すというのは確かに道理にかなっているし、あれだけのことをされたのだからこれくらいはして当然と、私たちは全員一致で好恵を今後の誕生会から閉めだすことを決議した。

自分のうかつさに思い至ったのは、その決議から数日が流れてからのことだ。私は肝心なことを忘れていた。グループで二番目に十歳を迎えた好恵に続く、三番目の十歳。

玄関わきの階段を上った好恵の部屋で、そこには楽しい会を思わせる装飾のひとつもなければ、ごちそうの匂いもなかったのだ。「あらあらみんな、今日はどうもありがとうねえ」と、甘い声で出迎えてくれるおばさんの姿もない。どうもおかしい。ごちそうのために朝食を抜いて臨んだ私たちは、もじもじと顔を見合わせた。まさか。そんな。いや、バカな。困惑を隠せない私たちの中で、好恵だけがただ一人、普段以上にニコニコと嬉しそうにはしゃいでいた。リーダー格の春子がしびれを切らしたように「プレゼント」と声を上げたのは、ただ好恵のおしゃべりをきくだけで一時間近くが経過した頃だ。

「そろそろプレゼント、渡そうよ」

この場に展開をもたらすことで、パーティーの始まりをうながすような言い方だった。

「うん、そうだね」

「プレゼント、プレゼント」

「お誕生会だもんね」

しかし、私たちが次々にプレゼントを渡し、そのたびに好恵が歓声を上げて、とうとう最後の包みが開かれても、ケーキとごちそうは依然として姿を現さなかった。

「好恵、ちよつと」

階段の下からおばさんの声がしたのは、すっかり無口になった私たちに、さすがの好恵も言葉少なになった二時すぎのこと。その少し前に玄関の戸が軋む音をきいたから、おばさんは私たちへのお返しでも買いに出ているのかもしれない、とにわかに希望が射してきた。が、それもほんのつかの間にすぎなかった。

「ちよつと待って」と階段を下りていった好恵は、数分後、ごちそうのお皿一つ運んでくるでもなく、ただ赤い目をして戻ってきたのだ。

「好恵、どうした」

「なんかあったの」

私たちが何をきいても答えず、戸口に立ちつくしたまま泣きそうな顔をしている。代わりにその答えを私たちに告げたのは、少し遅れて階段を上ってきた好恵のおばさんだった。

好恵に最初に手を下すいやな役まわり……。

そう、私は三週間後に誕生日を控えていたのだ。

七月八日。七夕の翌日にあたる私の誕生日は日曜日だった。この年も織姫と彦星は逢いびきを果たせず、母は朝から窓辺に垂らしていた笹を片付けると、代わりに折り紙や紙テープで居間を彩った。すでにごちそうの下準備は整えられ、冷蔵庫には子供心をそそのかす食材がばんばん詰まっていた。中でもひととき目を引いたのは、『HAPPY BIRTHDAY NORIKO』とホワイトチョコで描かれた手作りのチョコレートケーキだ。食器棚にはお菓子の数々もスタンバイされていて、中には普段あまり食べさせてもらえない体に悪そうなものもある。これがいつもの誕生日なら、私は幸福度一二〇パーセントで宙に浮いていたことだろう。しかし、私は疲れきっていた。

好恵を誕生会から締め出すことに決めたあの日から三週間、私は人の視線とはこんなにも怖いものかとつくづく思い知らされながら過ごした。いつ、好恵に誕生会のことをきかれるのか。いつ、好恵は自分が誕生会に招かれないことを悟るのか。私は絶えずびくびくと好恵の視線ばかりを気にしていたのだ。

好恵に「おはよう」と声をかけられるだけで、私は招待状の催促でもされたように顔を赤くした。会話の途中で沈黙が訪れるたび、「ところで、紀ちゃんのお誕生会だけ……」と切りだされるのではないかとどきまぎした。毎日が緊張の連続。七月八日が近づくとその緊張は高まっていった。

これほど自分が小心者とは知らなかった。復讐がこれほどの苦痛を伴うものとも知らなかった。ついに誕生日を迎えたその日、だから私は誕生会やプレゼントの喜びより、ようやくその苦痛から解放される喜びのほうが大きかったのだ。誕生会は滞りなく進んで、終わったと思う。もともと滞りなど起こりようもないパーティーだ。

【中略】

みんなの帰った後、急にがらんとした部屋の中で、私は一気に脱力した。もらったプレゼントをしまうのも億劫で、その場に散らかしたまま二階へ上がると、部屋のベッドにどてつとつぶした。甘いケーキの味はとうに忘れ、苦い後味ばかりが残っていた。

一生に一度しかない十歳の誕生日。もう永遠に取り戻せない特別な一日。

好恵はあの日、どんな思いで十代への第一歩を踏みだしたんだろう。そして今日はどこで何を思い、過ごしていたんだろう。

誕生会の終了と同時に、私はこの胸のややもやから解放されるはずだった。なのにもやもやは増す一方で、^{また}の裏に焼きついた好恵の視線はなおも私を苦しめる。ついてない、と心底思った。私の誕生会が七月八日でなかったら、秋や冬の終わりのほうだったら、私は例年通りに何も考えず楽しい一日を過ごしていたはずだ。一年で一番幸せな一日。なのに、好恵の次に生まれたばかりにすべてがだいたしなくなってしまった。ついてない。ついてない……。

「紀ちゃん」

と、そのとき、襖のむこうから姉の声がした。

入るよ、とノックもせずに現れた姉は、ベッドに伏せた私のもとへずかずかと歩みより、黄色いリボンのなかったたんば文具店の包みを差しだした。

「今、家の前であんたの友達みたいな子に会ってさ。これ、あんたに渡してって」

「え」

「直接渡せばって言ったら、自転車に乗っていつちゃった」

姉から受け取った包みのリボンをほどくと、私が大好きなキャラクターの豪華な文具セットが入っていた。そこで、私は思わず自転車で飛び乗り、好恵の家へと向かった。彼女の家の前で自転車を荒っぽく乗りすけると、私は深呼吸をし、勇気を出して玄関のチャイムに手を伸ばした。

どうか鬼母が出ませんように。

ときどきしながらブザーを押すと、数秒後に「はい」と低い声がして、扉が開かれた。

「ひっ」

現れたのは鬼母だった。

「あ……ら」

エプロン姿のおばさんは、濡れた手をそのポケットのあたりでぬぐいながら、

されるのだと私は初めて知った。そういう私も緊張で口が強ばり、「もつと食べて」とうながすおばさんにうなずき返すのがやっとだったけれど。

おばさんは数分おきに「もつと食べて」とくりかえした。ウインナーを独占しようとする弟の手をはたいて、小皿に私のぶんを確保してくれもした。そのくせ、おかずの量を気にしているのか自分ほとんど箸を伸ばそうとしない。

もしかして……。あいかわらず気難しげな顔をして、それでも必死に私を氣遣うおばさん。そしてその様子をじっと見据える好恵の横顔をながめているうちに、私はなぜ今、自分がここにいるのかわかったような気がした。

好恵にとつて一生に一度の十歳の誕生日。あの日、私たちはここへ来なければよかったと後悔したけれど、好恵も好恵で私たちを呼ばなければよかったと後悔し、おばさんもまた何らかの悔いをその胸に抱えてきたのかもしれない。

そう思った瞬間、あまり馬の合わない友人宅での居心地の悪い夕食会は、何か大事な意味を宿した苦行へと変わった。取り返しつかない何かを取り返そうとするように「もつと食べて」を連発するおばさんは、確かに私のどこかを満たし、そしてきつと、好恵のどこかを癒したのだ。

「ごちそうさまでした。おいしかったです」

夜も更けて皿も空になると、私は疲れた様子のおばさんに礼を言い、「もう来んなよ、クソバカ女」と憎まれ口を叩く弟を柱の陰でこづいてから、好恵の家を後にした。いいと言ったのに、好恵は途中まで送るといつてきた。

もう一日早ければ織姫と彦星も再会できたにちがいない空の下、街灯に照らされた蚊の群れのむこうに無限の瞬きを望みながら、私たちは無言で家への道を歩いた。私は自転車を押しながら、好恵はその後ろからてくてくと。途中で、私が「もういいよ」と何度も好恵をふりかえったのは、黙りこんだきりの彼女をおもんばかったことではなく、自転車で帰ったほうがよほど速いからなのだが、好恵はそのたびに「もうちょっと」と見送りの距離を引き延ばし

私に困惑の目をむけた。夕食時のせいか、扉のむこうからは炒めもののいい匂いが香ってくる。後ずさる私を前に、おばさんはその匂いをたどるようにふりかえり、好恵はどうのとぶつぶつ言いながら奥の部屋へと踵を返した。私のことを憶えていたらしい。

数秒後、重たい足音と共に好恵が現れた。

「どうしたの」

開口一番に問われ、私はたじろいだ。好恵の声には「なんか用？」とでもいうような、白々とした響きがあったからだ。

「あの……その、プレゼントありがとう」

言葉につまった末、いきなり本題に入ると、

「え？ ああ、あれか」

自転車にはまだぬくもりが残っているはずなのに、^⑥好恵は遠い昔でもふりかえるようにわざわざ首を傾げた。リアクションの達人にしては鈍すぎる反応。私はますます勢いをそがれて動揺した。すまし顔をあさつての方向へむけている好恵を見ると、自分がここに何を期待して来たのかわからなくなってくる。

苦しい沈黙の末、ひとまずここは撤退だ、と逃げることにした。じゃ、それだけ、と早口で言いながら背をむけ、ドアノブに手をかける。

「夕ごはん……」

と、そのとき、背中からおばさんの声がした。

「夕ごはん、まだなら食べていきなさい」

最初のうち、私はそれが自分にむけられた言葉とは思えなかった。あのおばさんがこんなことを言うわけがない。しかし、ふりむくとおばさんは怖いくらいにまっすぐに、確かに私を見つめていた。

【中略】

アジフライ。ピーマンとウインナーの炒めもの。かぼちゃの煮つけ。ツナサラダ。味噌汁。

テーブルの上はそれなりににぎやかだったけれど、しかし静かな晩餐だった。

好恵は学校にいるときの十分の一もしやべらず、お姉さんは終始ぶすつとしていて、第一人者が悪たれをつき続け、それをおばさんがたしなめる。好恵はなにも無限のエネルギーを持っているわけじゃなく、あのサービスピ精神は学校でのみ発揮

た。

何か言いたげで、なのに言えずにいた好恵がようやくその一言を口にしたのは、そんなやりとりが幾度となく続いた後、「ほんとにもういいから」と私が自転車のサドルに跨ろうとした瞬間だ。

「……つてくれる？」

好恵は私を遮るようにして自転車のハンドルを握りしめ、かすれ声でささやいた。

「え」

「うちのお母さんの料理、おいしかったって、明日、学校でみんなに言ってくれる？」

私たちを包んでいたなまぬるい夜気が、ふいにびしゃりと肌を打った気がした。私はとっさに目を伏せ、からから回る自転車のペダルを見下ろした。そして、その回転が止まってからようやく顔を持ちあげた。

好恵は唇を踏んばって私の答えを待っていた。

「うん。言うよ」

それだけ返すのが精一杯だった。

「おばさんの料理、おいしかったって、明日、みんなに言う」

今にも泣きそうなくせに意地でも泣かない好恵の顔が、なんともいえない^⑦の表情に変わった。好恵は小さくうなずき、ふうつと息を吐いて、私の自転車から手を放した。それからすばやく回れ右をして、もう用は済んだというふうにてのひらをぶらぶらやりながら、廊下で男子を追いまわすときのような軽快な駆け足で、深い夜のむこうへと遠ざかっていった。

(森絵都『永遠の出口』集英社)

(1) ①を含む傍線部は「書き表されていないルール」という意味です。漢字二字を入れなさい。

(2) ②を含む傍線部は「その場を」まかす」という意味です。二字を入れ、慣用表現を完成させなさい。

(3)

③「みんなの顔が、瞬時に一層、赤く染まった」のはなぜですか。
ア 最初から抱いていた悪い予感的中し、息苦しくなったから。
イ せっかくの好意が仇となり、恨み辛みがこみ上げてきたから。
ウ 招かれざる客だと分かり、行き場のない憤りを感じたから。
エ 朝食抜きで今にもお腹が鳴りそうで、恥ずかしくなったから。

(4)

④「に入る語を答えなさい」。
ア 判断した イ 決意した ウ 理解した エ 感心した

(5)

⑤「好恵は遠い昔でもふりかえるようにわざわざ首を傾けた」について以下の問いに答えなさい。
①「好恵」が意図して鈍い反応をしたのは、「すまし顔」という表現からも分かりますが、このときの「好恵」の心情が表れている描写を本文中から五字以内で書きぬきなさい。

②このときの「好恵」の気持ちとそのようにふるまった理由を説明するものとして最も適当なものはどれですか。

ア「私」ときちんと仲直りしたくて誕生日プレゼントを届けたものの、あまりの気まずさに後悔しているから。
イできれば「私」と顔を合わせたくないが、プライドから何も気にしていない体を装う必要があったため。
ウクラス中に悪口や噂を広められて、さらに自分を陰で仲間外れにした「私」を困らせようと思ったから。
エ「私」から誕生会の話題をふられるのではないかと内心恐れているが、それを悟られないようにするため。

(6)

⑥「あさつての方向」の意味を答えなさい。
ア 見当違いのところ
イ 二人の足下のあたり
ウ「私」が来た方向
エ 鬼門にあたる方角

(7)

⑦「もつと食べて」と何度も何度もすがす好恵の母親の行動は、母親のどのようなきっかけから生じた思いからくる、何のための行動ですか。「きつかけ」と、母親の「思い」と「目的」にふれて「うための行動」に続くよう、五十字以上六十字以内で説明しなさい。

(8)

⑧「に入る語を答えなさい」。
ア 落胆 イ 感嘆 ウ 神妙 エ 安堵

(9)

この小説を説明した次の文章について、以下の問いに答えなさい。

六月十日（日）、待ちに待った好恵の誕生日会。ところが、〈私たち〉が受け取ったのは、おばさんからの「帰ってね」のたった一言だった……。その後、〈私たち〉は好恵に「誕生会の恨みを誕生日会で返す」という復讐計画を立てた。昔の人がよく言う①だが、この計画を立ててから、〈私〉は人から受ける視線がいかに恐ろしいものかを極度の緊張の中で思い知った。他人へ仕返すことで、こんなにも心を締めつけられるなんて……〈私〉は毎日恐怖や緊張と大きな②感に襲われた。それでも、七月八日（日）の自分の誕生日会さえ終われば、この③感からきつと解放される……そう信じていたが、むしろさらに重くのしかかった。それだけじゃない。一生に一度しかない十歳の誕生日、〈私〉は当たり前のように家族や友人と楽しく過ごせたけれど、その「当たり前」が「当たり前」にできなかった好恵の気持ちはどうなるの？……このとき初めて〈私〉は自分のことしか考えなかったことに気づかされた。そして、思わず彼女の境遇に同情した。

その夜、なりゆきで好恵の家で夕飯をごちそうになったとき、好恵やおばさんたちの様子を見て、〈私〉は④言い表せない心境にも気づくことができた。別れ際に好恵が見せた何とも言えないあの表情、彼女にも〈私〉のこれまでの悔いてきた思いに気づいてもらえただろうか。

①

① に入ることわざを十字で答えなさい。

②

② に入る語を自分の言葉で漢字二字で答えなさい。

③

③「言い表せない心境」とは何ですか。それに該当する一文を本文中から探し、はじめの五字を答えなさい。

氏 名

受験番号

- ・句読点や「 」も一字とします。
 ・記号の付いているものはすべて記号で答えなさい。
 ・※の欄には何も書かないこと。

一

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
ヤ オ モ テ	フ ク シ ョ ウ	タ イ シ ャ ク	シ ュ ウ ト ク	ヨ キ ョ ウ
	の景品	する	物	

※

二

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
		㉔	㉕		

※

三

(1)	(2)	(3)	(4)
(5)			
①			
			から
15			
(5)			
②		③	④
	5		
(5)			
⑤			
			ということ
15			

※

※

四

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
内					

※

五

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
不				①	②
(7)					
					ための行動
(8)	(9)				
	①			②	③
				感	

※

※

※

合計